

# 相互行動心理学の基本概念

## Basic Concepts of Interbehavioral Psychology

(1993年4月7日受理)

園山 繁樹

Shigeki Sonoyama

Key words: 相互行動の場 interbehavioral field, 単位相互行動 segment of interbehavior  
刺激機能 stimulus function, 反応機能 response function  
相互行動の歴史 interbehavioral history, 状況要因 setting factor  
接触媒体 medium of contact

### Abstract

The contributions of Kantor's interbehavioral psychology as a natural science approach to the study of human behavior are becoming to be recognized in America. However, very little is known about Kantor and interbehavioral approaches in Japan. This paper is the second in a series describing interbehavioral psychology and its components: interbehavioral field, segment of interbehavior, stimulus function, response function, interbehavioral history, setting factor, and medium of contact.

我々は誰一人として真空の中で生きているわけではなく、ある環境の中で日々生活し、環境と相互作用しながら人生を送っている。それゆえ、人間の心理学的現象もその人と環境との相互作用の産物であると言える。このことに異論を唱える人はいないだろう。

しかしながら、心理学が人と環境の相互作用としての心理学的現象を十分に研究してきたとは言いがたい。前稿(園山, 1992b)では心理学的現象を人と環境の相互作用として研究するパラダイムとして、J.R.カンターが創始した相互行動心理学の概要を紹介した。そこでは、同じ行動主義心理学であるB.F.スキナーの行動分析と類似した特徴を持ちながらも、それをさらに拡充するパラダイムであることを示唆し、心理学の臨床領域にも新しいアプローチを生み出しつつあることを手短かに述べた。我が国で相互行動心理学を紹介した論文はおそらく前稿が最初であり、行動主義的な方向性を持つ研究者にも十分に理解されているわけではない。そこで、相互行動心理学の有用性をさらに理解していくために、本稿では相互行動心理学を構成している基本概念を若干詳しく論述する。

方法としては、カンターの主著の中で相互行動心理学が体系的に著されている *Interbehavioral Psychology* (1959; 以下Iと略し引用頁を示す) と *The Science of Psychology: An Interbehavioral Survey* (1975, スミス, N.W. と共著; 以下Sと略し引用頁を示す), 及びその解説版といえるプロンコ, N.H. 著,

*Psychology from the Standpoint of an Interbehaviorist* (1980; 以下Pと略し引用頁を示す)を論述の基本文献として引用する。また理解しやすいよう具体的な例も挙げることにする。

## 前 提

カンターは心理学的現象はすべて生活体(筆者の関心は動物ではなく人間であるので、以下では生活体として人間を取り上げる)と物(以下、物と言う場合は物質だけでなく他の人間や動植物や物理的エネルギーを含む)との相互作用から成り立っているので、心理学は人間が物や出来事とどのような相互行動(interbehavior)をどのように行っているかを研究するものであると言う。また、人間と物との相互行動は機能と呼ばれる特定の相補的行為から成り立っているので、心理学は反応機能と刺激機能の相互行動を調べるのもであるとも言う。ここで言う「相互行動」は我々にとって新奇な用語であるが、一般的な言い方をすれば刺激と反応の相互的な行為(interaction)ということである(P15)。すなわち、刺激と反応を各々別々に記述するのではなく、ひとまとまりとして記述するのであり、次のようなパラダイムとして表すことができる(188)。

$$S \longleftrightarrow R$$

カンターのこのような相互行動の考え方は、通常我々が考えている行動観とはその意味合いが大きく異なる。我々が通常行っている行動の記述ではその機能に言及することはほとんどないし、刺激機能と反応機能をひとまとまりとして行動の記述とすることもない。相互行動心理学は心理学的現象を刺激機能と反応機能のまとまりとして捉えようとするものであり、あるいは逆に刺激機能と反応機能のまとまりが心理学的現象であると考えた立場である。後述するように、単なる物あるいは単なる行為は心理学の中心的関心事ではなく、人間と環境との相互作用、すなわち刺激機能と反応機能のひとまとまりが基本的な中心的関心事となる。

そして相互行動心理学では当該の刺激機能と反応機能、すなわち当該の相互行動の成立に影響を及ぼしている観察可能な諸変数を明らかにする。基本的に様々な変数が関与していることを前提としている。それも当該の相互行動が生起している現状における諸変数だけではなく、それ以前の歴史的状況の中にも変数を特定しようとする。また変数は人間の外側だけではなく人間の内側にも特定され、相互行動の生起にはこれら多くの変数が影響し合っていることを明らかにするのである。

表1は相互行動心理学の前提となる公理群と心理学的現象の構成概念(184-95)を示したものである。

このような前提をとる相互行動心理学は従来の精神主義心理学とワトソン流の古い行動主義心理学の双方を批判する。例えば、プロンコは次のような式で両者が二元論であることを指摘し(P30-31)、スマスは次のようにそのパラダイムの違いを指摘している(Smith,1984)。

	プロンコ	スマス
精神主義心理学	= からだ + ころ	= $S \rightarrow I \quad V \rightarrow R$ (IVは媒介変数)
ワトソン派行動主義心理学	= からだ - ころ	= $S \rightarrow R$

表1 相互行動心理学の前提 (Kantor, 1959, pp.84-95より作成)

**公理**

- 公理1 心理学の場は様々な要因によって構成されている。
- 公理2 心理学の現象は生物的現象や物理学的現象と同様社会的現象とも関連している。
- 公理3 心理学の現象は生態学的な相互行動から発展していく。
- 公理4 心理学の相互行動は特定の器官や細胞ではなく生活体全体に係わる。
- 公理5 心理学の現象は個体発生的なものである。
- 公理6 心理学の相互行動は他のタイプの相互行動とは異なる。
- 公理7 心理学的な構成物は元々の現象と連続している。
- 公理8 心理学の現象は内的あるいは外的な決定因ではなく相互に関連した諸要因で構成されている。

**心理学的現象の構成概念**

- 1) 心理学的な相互行動の場が単位相互行動を構成している。
- 2) 構成概念は単位相互行動の分析とその起源を明らかにする。
- 3) 刺激と反応は対称的で相補的な機能を構成する。
  - ①異なる物が同じ刺激機能を持つことがある。
  - ②同じ物が異なる刺激機能を持つことがある。
  - ③異なる行為が同じ反応機能を持つことがある。
  - ④同じ行為が異なる反応機能を持つことがある。
- 4) 相互行動の接触媒体は単位相互行動を可能にするという本質的な要因である。
- 5) 全般的な周囲の環境としての状況要因は単位相互行動の抑制条件や促進条件として働く。
- 6) 相互行動の歴史は心理学的場の展開から成る。
  - ①反応の成立ちは相互行動している生活体の諸活動を通してもたらされる。
  - ②刺激展開は相互行動において物の刺激機能が展開していく過程である

そして、プロンコは精神主義心理学への批判として、①ここは観察不可能であり、仮設構成体にすぎない、②ここはそれ自体でこことは何かを説明し、その仮説がどのようにして成り立つのかを例証しない、③その二元論は単に仮設されているだけで、人間が本当にからだところから成立していることの妥当性が検証されていない、④科学的な研究がされていないことなどを挙げ、一方、ワトソン派行動主義心理学に対しては、①心理学的な現象を単なる解剖学的及び生理学的な動作に矮小化してしまった、②理論面で生活体に重点を置き過ぎたため、状況要因や歴史要因を考慮せず、かえって脳や遺伝子の働きに行動の説明を求めることになった、③その結果、研究対象を動物実験や条件反射などの単純な行動に限ることになった、④刺激と反応を因果関係でのみ理解し、その他の変数を無視しているといった点を挙げている (P29-31)。相互行動心理学はこれらどちらにしても二元論的である心理学とは異なり、ただ観察可能なデータに基づいて人の行動を研究しようとするものである(そもそも相互行動心理学は「ここ」という観察不可能な仮設構成体を前提としないという点で、ワトソン派行動主義心理学と異なっている)。

一方で相互行動心理学に近い心理学として、プロンコはスキナーの行動分析 (behavior analysis) やバーカーの生態学的心理学 (ecological psychology) などを挙げている (P35-41)。行動分析は行動の心理学的な説明からここらや神経系の働きといった観察不可能な概念を排除した点で特に類似しており、生態学的心理学は実験室に留まらず自然場面での行動研究へ向かったという点で類似している。

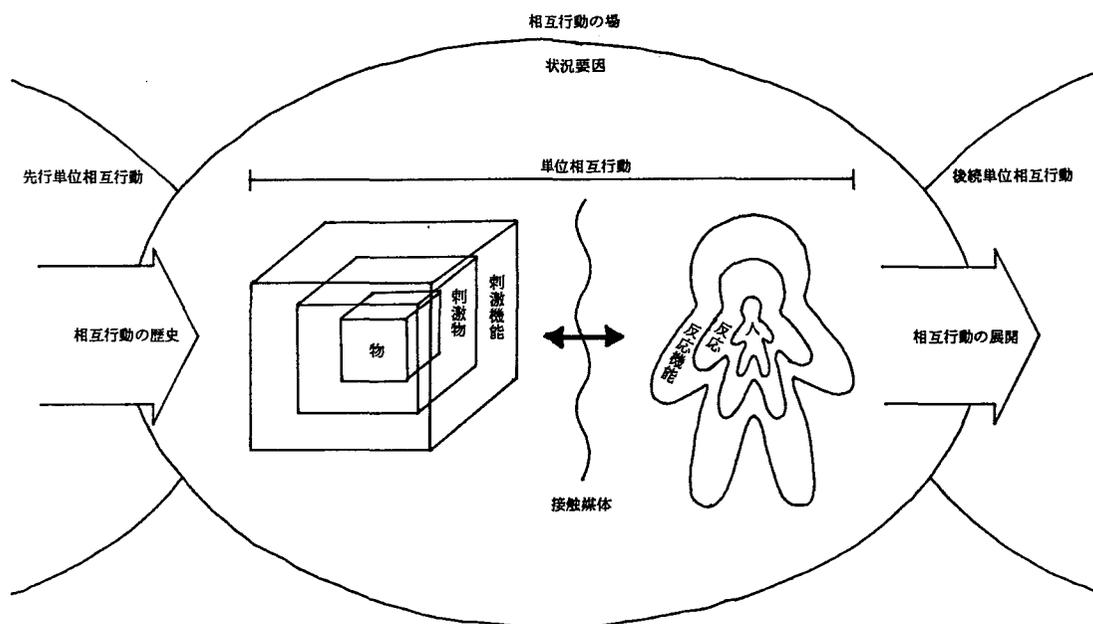


図1 相互行動心理学の基本概念

## 基 本 概 念

相互行動心理学の基本概念は図1に例示したものである。

### 相互行動の場 (interbehavioral field)

相互行動の場とは、ある心理学的事象を構成するあるいはその事象に関係する各々独立した様々な変数の集合またはその全体を指して言う。心理学の仕事はその場の諸変数の中で当該行動の生起を説明する変数群を見つけることである(P5)。しかし、ここで「説明する変数群」というのは、公理1と2に表明されているように、ある変数が行動生起の原因であるという因果関係を意味するのではなく、その行動生起に関係している変数ということである。その関係の仕方には原因的な関係もあれば必要条件的な関係など色々な形での関係の仕方があることを意味している(190)。

行動の生起を因果関係の観点から説明することに慣れている我々にとって、行動生起と場の変数の関係を説明するという観点は若干理解し難いところである。しかしながら、後述する他の基本概念を知るにつれて、行動の生起を単なる刺激の存在によって因果関係的に説明することが如何に表面的な理解でしかなく、行動の説明として如何に不十分であるかがわかるだろう。ある行動の生起にはその場に現存する諸変数ばかりでなく過去の変数など多様な変数が関係していることが理解されるであろう。

### 単位相互行動 (segment of interbehavior)

我々の行動は途切れ途切れに生じるのではなく、死ぬその時まで間違いなく連続している。行動が連続したものであるということは、行動を観察し説明するためにどの単位を切り取るかという重大な問題

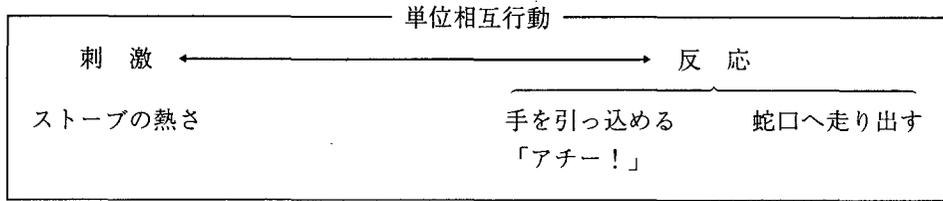


図2 単位相互行動

を心理学に投げかけている。相互行動心理学ではその単位として一つの刺激とそれに関連した反応からなる単位相互行動を切り取る(S32)。その場合、単一の反応がある場合だけでなく、通常は複数の反応が存在していることが多い。例えば、熱いストーブに手で触った時、我々はほぼ間違いなく反射として手を引っ込め(無条件反射またはレスポナント)、おそらく口で「アチー！」という大声(オペラント)を上げる。そして急いで水道の蛇口の方へ走り出す(オペラント)であろう。ここでは、図2のように熱いストーブに触った瞬間から少なくとも3つの反応が生じており、それらをひとまとまりとして単位相互行動とみなす。

カンターはさらに単位相互行動を次の3組のタイプの他様々なタイプに分けることができると考えている(S38; P16)。

①操作単位相互行動とプロセス単位相互行動 操作単位相互行動というのは終わりのはっきりしたひとつの操作から成り立っているものであり、例えばバッターがボールを打つという場合が当てはまる。一方、ひとつの操作ではなくいくつかのプロセスから成り立っているのがプロセス単位相互行動であり、例えば数学の問題を解く場合やパズルを完成させる場合が相当する。

②遷延単位相互行動と瞬時単位相互行動 はっきりとわかる短時間の内に遂行されるのが瞬時単位相互行動であり、ジュースの販売機にお金を入れ、ボタンを押し、ジュースを取り出すといった場合である。一方、遷延単位相互行動ではその行為が完遂されるまでどれほどの時間がかかるかはっきりしない場合であり、例えば食器棚の後ろでゴキブリの音を聞きゴキブリが現われるまで待ってから殺虫スプレーを噴射することが当てはまる。

③既知単位相互行動と未知単位相互行動 既知単位相互行動とは行為の遂行者が自分がしている行為を認識している場合であり、多くの場合が当てはまる。一方、未知単位相互行動は遂行者が自分がしている行為を認識していない場合であり、寝ぼけて歩いたり寝言を言ったりするのが当てはまる。これは一般に無意識的行動と呼ばれているものである。

#### 刺激機能 (stimulus function)

相互行動心理学では機能の獲得という観点から刺激を發生的に捉える。すなわち、人が生活している環境内に存在する物や人や動植物や物理的エネルギー等は、当初刺激機能を持たない単なる物であるが、それが人との相互作用の中で様々な機能を獲得し刺激物に発展していくと考える(P20)。

1)物 物(他の人や動植物や物理的エネルギーを含む)の多くは当初刺激機能を持たない。新生児にとって身の回りに様々な玩具が置かれても、それは新生児の行動とは何らの関係も持っていない(S40)。すなわち、それらの玩具は新生児にとって何らの刺激機能も持たず、ただの物としてその状況に存在しているだけである。また、パソコンの操作法を知らない人にとってパソコンはただの物であったり無用の長物であったりする。人と物のかかわりがなければそれは心理学的状況の外にあると言える。

2) 刺激物 物は人とのかかわりによって刺激機能を持つようになる。そして、人と物のかかわりを通してさらなる刺激機能が付与されていく。例えば、子ねこを初めて目にした幼児は子ねこに触るかもしれない。そこで子ねこが幼児に咬みつき、手を引っ込めたとする。この場合、幼児にとって子ねこは、接近し触るという刺激機能と手を出さないという刺激機能の2つを獲得した可能性がある(S41)。このことは、その後同様な場面を作って確かめることができる。また、パソコンでワープロソフトの使用法を教えてもらい習得した場合、その人にとってパソコンが単なる物から刺激物に変わる。こうした刺激機能の獲得過程は、具体的にはパブプロフヤスキナーの条件づけのプロセスである(S102; P114)。

3) 刺激機能 刺激物の刺激機能は人によって異なるし、1つとは限らないし、状況によって同じ刺激物が異なる刺激機能を持つことが多い。すなわち、刺激物とその人のかかわりや、その時々状況によって刺激機能が異なる(S41)。例えば、ワープロソフトの使い方しか知らない人にとって、パソコンの刺激機能はワープロが出来ることだけである。しかし、その他に表計算ソフトや統計ソフト、名刺管理ソフトの使用法を習得している人にとってはパソコンの刺激機能は多種であり、さらにはその他のパソコンソフトを使いこなしたりコンピュータ言語によって自分でプログラミングすることによってパソコンの刺激機能は幾種類にも展開していく。また、実際にどのソフトを使うかはその人が置かれた時々状況によって変わる。

4) 刺激機能が展開する3つの形態 刺激機能は人と物とのかかわりの中で発生し展開していくが、展開していく形態として3つのものがある(S41)。

①普遍的刺激機能 これは最も単純な形態であり、物に本来備わった属性と人の生物学的構造に基づく。例えば、先の例では熱いストーブに触って手を引っ込めるという反射が相当し、どの人にとっても共通したものである。

②個別的刺激機能 同じ物であっても人によって異なった機能を持つ。例えば、ある石を拾ったとき、Aさんは川に向かって投げ、Bさんはコレクションに加えるために大事にポケットにしまった。このように同じ石であっても人によって刺激機能が異なる。それはその人のそれまでの石への経験が異なることによる。

③文化的刺激機能 これはある集団の構成員に共通した反応に関係している。ある物がその集団の構成員の共通した反応機能と対応している場合である。例えば、ある宗教では豚や牛への反応が集団内で共通していることなどがある。その他、我々が制度と呼んでいるものによって、集団内ではある刺激に対し同じ方法で反応するということが生じるのである。

これらを行動分析の強化概念(Ferster, 1967)との関連で言えば、普遍的刺激機能は「自然的強化随伴性」と近似し、個別的刺激機能と文化的刺激機能は「人為的強化随伴性」と近似した概念である。

5) 刺激機能のクラス 刺激機能のクラスとしてカンターは次の6組を例示している(S42-44)。

①一次機能と副次機能 普遍的刺激機能の場合のように、物それ自体に本来的に備わっている属性による刺激機能が一次機能である。これと対称的に条件反応(例えばベルが鳴ると唾液が分泌する)のように、条件づけのプロセスを通して本来その物に備わっていない機能を獲得したものが副次機能である。

②直接機能と代理機能 ある物の刺激機能がそれに引き続く反応機能と直接関係しているのが直接刺激機能であり、物それ自体に本来備わっているものでなくしかも間接的に反応機能と関係しているのが代理刺激機能である。例えば、カレンダーに記した目印がレストランへ出かける日を示している場合、レストランへ行くこと自体は目印と直接には関係なく、目印は代理刺激機能を持っていると言える。

- ③体内機能と体外機能 体内刺激機能はその人の状態や心理学的・生理学的行為の中に存在する。例えば、食物を摂らせようとする刺激はその人の胃の生理学的状態であり、歯科医院へ行くという反応は痛い歯の持つ刺激機能による。体外刺激機能はその人自身やその行為とは明らかに異なるようなあらゆる物の中に存在している。例えば、ある人は夕食のベルを聞くまでは食物に気づかないかもしれない。
- ④単一固有機能と複数固有機能 これまで述べてきた刺激機能は単一の物に本来備わっているものであり、単一固有機能と言える。一方、走って逃げるのが勇敢な行為であるのは、多数の敵に襲われるときである。ここでの刺激機能は一人の敵ではなく多数の敵ということであり、複数固有機能と言える。
- ⑤調節機能と補助機能 調節機能とは人が注目しうる物であり、補助機能とは調節機能に随伴する。言語反応にこのことがよく表れている。例えば、誰かがあなたに「あの建物を見てごらん」と言った時、あなたの反応は当該の建物(調節機能を持つ)と誰かが言った言葉(補助機能を持つ)の両方によって喚起される。この場合、基本的な相互作用は言語行為に対してというよりも建物に対してである。
- ⑥明白機能と曖昧機能 私があなたの依頼に「だめ」という時、その刺激機能があなたにあることは明白である。しかし、私が突然鼻歌を口ずさむとき、その刺激機能ははっきりしない。

#### 反応機能 (response function)

刺激の場合と同様、心理学的に重要なのは反応の形というよりもその機能である。実際、刺激機能と同様、反応の形は同じでもその反応機能が異なる場合が往々にある。例えば、石を拾い上げるという反応の形は同じでも誰かにぶつけるために拾う場合もあり、その石が邪魔だから拾う場合もある。どちらの機能を持つかはその場の状況要因や相互行動の歴史による(S44)。また、日本語の「いいえ」が、それが使われる状況によって否定になったり肯定の意味を持ったりすることは日常よく経験する。逆に、反応の形は異なっても機能が同じ場合がある。例えば、筆算で足し算をするのと算盤や電卓で足し算をするのでは、反応の形は異なっても合計が出るというその機能は全く同じである。

反応機能と刺激機能は両者が相互依存的なものであることを意味しており、両者が区別されるのは相互行動のうちで刺激の側を強調するか反応の側を強調するかによってである(Smith, 1984)。

#### 相互行動の歴史 (interbehavioral history)

相互行動心理学は行動を水の流れとして捉える。すなわち、時間軸上で変化していくものとして行動を捉える。行動は常に展開(evolution)し、行動の歴史がある。刺激機能と反応機能のまとまりである相互行動も、その発生から展開へと歴史を持っており、当該の相互行動を説明する際にもそれまでの相互行動の歴史を分析に加えることになる。刺激機能と反応機能のまとまりが相互行動であるので、その歴史を考える際にも、反応の側と刺激の側の機能という双方の歴史を考えなければならない(といっても双方は相補的であるが)。カンターは反応側の歴史として「反応の成立ち(reactional biography)」、刺激側の歴史として「刺激展開(stimulus evolution)」を区別している(S59-60)。

刺激と反応の機能が発生し展開していく原動力は人と物のかかわりであり、どのようなかかわりをするかによって反応の成立ちと刺激展開が異なってくる。図3は刺激機能の項で述べたパソコンの刺激機能と利用者の反応機能の展開を例示したものである。また、どのような相互行動の歴史が展開されるかは生物学的要因とも関係し、その基盤の上に相互行動が発展する。例えば、視覚障害、聴覚障害、脳損傷、肢体障害などのいわゆる器質的障害がある場合は、補助機器が開発されなければテレビの視聴や車の運転などの相互行動の歴史に影響を受けることも多い。また文化的要因も影響し、どの言語を話すか、どのようなおしゃれをするかなどはその例である(S65-68)。

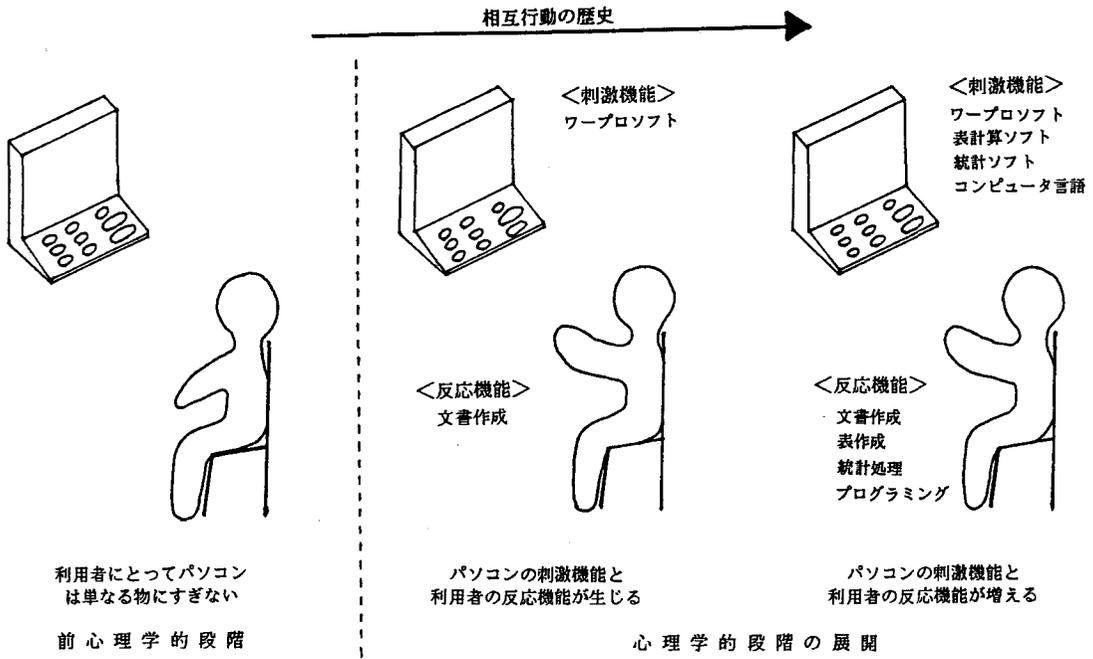


図3 パソコンー利用者の相互作用の歴史

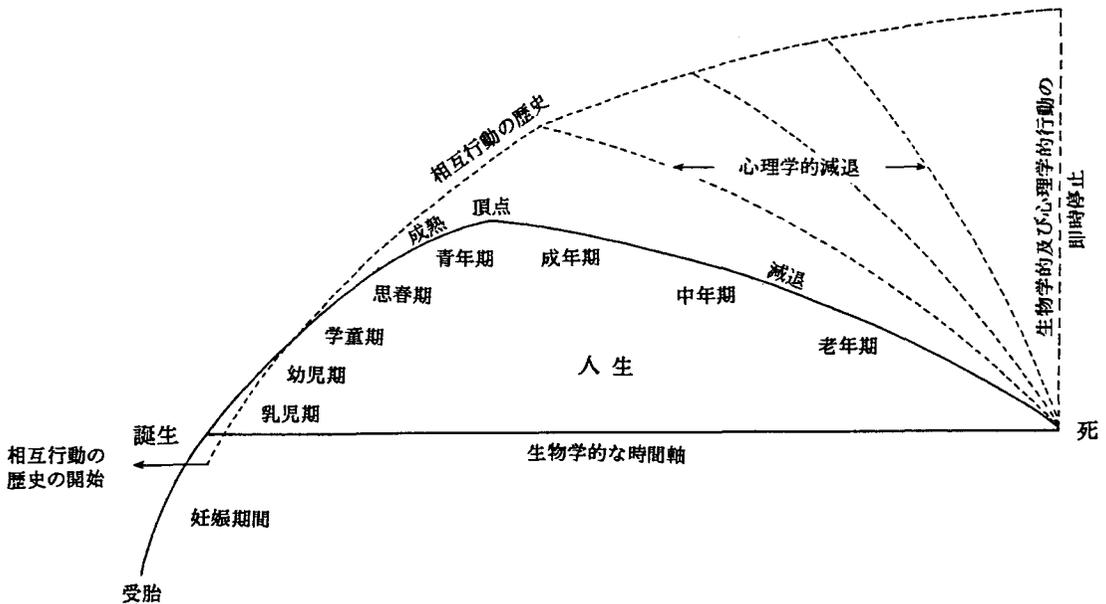


図4 生涯にわたる相互作用の歴史 (Kantor and Smith, 1975, p.63より)

カンターは相互行動の歴史が生物学的な歴史と異なっていることを図4のように例示している。これは成年期以降の加齢に伴う身体の衰えが必ずしも心理学的な減退と一致するわけではないことを示している。事実カンター自身も90歳を越えてなお25の著作を残している。また生涯にわたる相互行動の歴史に次の3つの段階を設定している。

1) 基盤的段階 基盤的(fundamental)段階は乳児期早期に相当し、この段階の相互行動は生物学的な成熟に依存しているところが大きい。この段階の行動は反射行動、ランダム行動、生態学的行動という3つのタイプに分けられる。生物学的な活動から心理学的な相互作用への移行の時期である(S95)。

2) 基礎的段階 基礎的(basic)段階は乳児期から幼児期、学童期に相当し、生物学的な成熟への依存を徐々に脱し家族の影響を大きく受けるようになる(S121)。物の名前を覚えたり服の着方を覚えたり食事のマナーを身につけたりするのは家庭にそれを教える人がいるからであり、生物学的な成熟によって自然に形成されるものではない。

3) 社会的段階 社会的(sociatal)段階は思春期以降の大人の時期に相当し、家族の影響を徐々に脱し社会の影響を大きく受けるようになる(S122)。この段階の行動は後基礎的行動、偶発的行動、特異的行動、文化的行動の4つのタイプに分けられる。

もちろん、この3つの発達段階は各々が重なり合う期間も長く、ある日突然次の段階に移行するというものではない。カンターのこのような発達段階論をさらに推し進めているはビジュとベアーである(Bijou and Bear, 1978)。

#### 状況要因 (setting factor)

相互行動心理学は刺激と反応を因果関係では捉えず、様々な要因が関係していると考える。相互行動はいつもある状況下で生じており、その状況の中で特定の相互行動の生起に影響を及ぼすのが状況要因である(I16)。状況要因はその所在によって大まかに3つのタイプに分けることができる。

1) 内的状況要因 人の側の要因である。例えば、空腹、満腹、渇き、健康状態、疲労、嗜癖の有無、薬物、年齢などが挙げられる。清涼飲料の自動販売機は渇きを覚えていない人には何の反応ももたらさないであろう。朝から偏頭痛に悩まされている人はちょっとした音にも声を荒げるだろうが、頭がすっきりした日にはその音は全く気にならないだろう。

2) 外的状況要因 環境側の要因である。例えば、教室に教師がいないときには生徒たちは騒ぐだろうが、教師が入室したとたん静かになるだろう。また自分の子どもに対する言葉遣いは自宅と学校では当然異なってくる。十円玉が落ちていても、誰かが見ていれば拾わないかもしれないが、近くに誰もいなければ素早く拾ってポケットに入れてしまうだろう。

3) 時間的状況要因 過去の出来事も現在の相互行動に影響を及ぼす。例えば、会社で上司に叱責された日には自宅に帰って騒いでいる子ども達を怒鳴るかもしれないし、会社で上司に仕事を誉められた日には子ども達と同じように騒いでいても気にも留めないであろう(図5参照)。同様に未来の出来事も影響を及ぼす。例えば、誕生日のお祝いにレストランでディナーを食べる日、息子は昼間母親の言うことをよく聞くだらう。逆に明日苦手な教科の試験がある日には些細なことでも母親に突っかかって来るかもしれない。

#### 接触媒体 (medium of contact)

我々が物の色に反応するためには色付きの物があるだけでなく光が必須条件である。玄関のチャイムに反応するためにはチャイムがなるだけでなくチャイム音を伝える空気が必須条件である。味や匂い

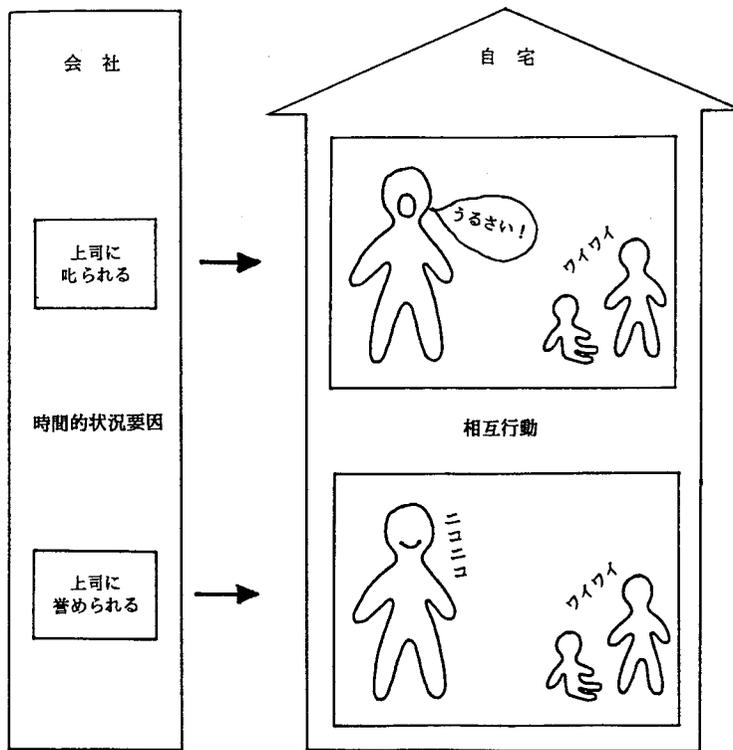


図5 時間的状況要因の例

に反応するためには味と匂いがある物だけでなくそれを伝える化学物質が必須条件である。このように、物と生活体の相互作用を可能にする媒体となるのが接触媒体である(S45)。

従来、行動の生起に関して接触媒体に言及されることは全くといってよいほどなかった。しかし、停電で真暗な夜に宿題を続けることはできないし、耳栓をしていてはチャイム音が鳴ってもお客さまを迎えに玄関に出ることができない。このように、身近な行動の生起にも接触媒体が影響を及ぼしており、行動生起を記述する際に考慮に入れるべき変数である。

## おわりに

説明のために挙げた幾つかの具体例から分かるように、相互行動心理学の基本概念は理解が特別難しいものではない。我々が日常行っている行動を考えると、かえってこれらの基本概念を用いて説明する方が理解しやすいのではないだろうか。

現在、相互行動心理学の基本概念の中で臨床的な観点から最も関心が持たれているのは状況要因である(Wahler and Graves, 1983)。しかし、筆者は刺激機能と反応機能の相補性及び相互行動の歴史が最も重要な概念と言えるのではないかと考えている。なぜならそれらの概念によっていわゆる「発達」が説明しやすくなるからである。従来、例えば、行動分析では三項随伴性を分析枠とするため、ある行動が強化や罰や消去といった操作の後にどう変化するかは説明できるが、さらにその後その行動がどうなっていくかは分析の範疇に入らな(随伴性の変化によって説明されるかもしれないが)。むしろ、

相互行動心理学のように発達を刺激機能と反応機能の変化発展と考えると、強化や罰の操作が撤去されても行動が維持されている場合、その時点では刺激機能と反応機能が以前のそれよりも変化しており、それによって行動が維持されているというように説明が可能である。

このように、相互行動心理学の基本概念は行動の説明に新たな視点をもたらし、ひいては臨床的にも理論的にも多くの貢献が期待できると考えられる。相互行動的な考え方が臨床的にどのように有用であるかについては先に考察したが(園山, 1992a), 理論的な観点からの有用性については稿を改めて論じたい。

## 引用文献

- Bijou, S.W. and Bear, D.M.(1978) : Behavior Analysis of Child Development. New Jersey : Prentice-Hall.
- Ferster, C.B.(1967) : Arbitrary and natural reinforcement. Psychological Record, 17, 341-347.
- Kantor, J.R.(1959) : Interbehavioral Psychology. Granville, OH : Principia Press.
- Kantor, J.R. and Smith, N.W.(1975) : The Science of Psychology : An Interbehavioral Survey. Chicago : Principia Press.
- Pronko, N.H.(1980) : Psychology from the Standpoint of an Interbehaviorist. Monterey, CA : Brooks/Cole.
- Smith, N.W.(1984) : Fundamentals of interbehavioral psychology. Psychological Record, 34, 479-494.
- 園山繁樹(1992a) : 行動療法における Interbehavioral Psychology パラダイムの有用性—刺激フェイディング法を用いた選択性緘黙の克服事例を通して—。行動療法研究, 18, 61-70.
- 園山繁樹(1992b) : 相互行動的アプローチ : Jacob Robert Kantorの遺産, 中国短期大学紀要, 23, 87-98
- Wahler, R.G. and Graves, M.G.(1983) : Setting events in social networks : Ally or enemy in child behavior therapy. Behavior Therapy, 14, 19-36.